

NEVER SAY NEVER

雨後の竹の子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作本編のインターハイから18ヶ月後の2月22日。

全国の麻雀ファンは、そのシーズン最後の締めくりである「全日本麻雀選手権」の決勝戦を前に沸き返っていた。

最も注目を集めたのはもちろん、ノーシードから決勝への進出を決め、電撃的に最前線への復帰を果たした国内不敗の女王こと小鍛治健夜永世八冠。その対抗馬となるのは大会二連覇中である、現日本代表エースの三尋木咏プロ。宿命の一戦を全麻雀ファンが固唾を飲んで見守っていた。

ところが決勝戦五番勝負の一試合目、思わぬアクシデントが起こり――

そういう感じの健夜ちゃん咏ちゃんのバトルの妄想です。妄想設定モリモリです。
ごめんなさい。

目次

プロローグ	1
一 目 目 (1)	11

プロローグ

—— 小鍛治健夜、二十四歳。

—— 三月十四日、午前十一時、雪。

—— 東京都、麻雀国際フォーラム、ホールD7。

その会見は予定よりも二時間も長引いた。

色々なことを聞かれ、話した。言うべきことはあらかじめ決まっていたし、質問されることも大体は予想がついたから、言葉に詰まるようなことはなかったけれど。

正直、会見の内容はあまり覚えてなかった。なるべくにも考えなくていいようにと、機械みたいに口を動かしていたから、あまり疲れも感じなかった。ただ、フラッシュの嵐が視界を白く塗りつぶすたびに、今まで私を応援してくれた人達の笑顔がかわるがわる浮かんで、きりりと胸が痛くなった。

無心に質問に答え続けていたから、色々なことを見落としてしまった。自分の手がずっと震えていることも気付かなかったし、同じ席に座ってくれた熊倉さんが、励ますように私の手の甲をさすり続けてくれたことも気付かなかった。だから、今この瞬間に自分の前でメディアの人達がどよめきを大きくしている理由も、すぐには分からなかった。どうやら会見が終了するということが正しい。そうだと気付いたのは、熊倉さんが「よく頑張ったね健夜」と優しく肩を抱いてくれた時。そうか、やっと終わるんだ。腕の中でそう思ったら、出どころの良く分からない涙が流れて熊倉さんの服を濡らしてしまった。そうして私は、自分がこの一日をどれだけ張り詰めて過ごしたのかを知った。記者たちの声を背に、連盟の人達の案内に従って慌ただしく廊下へと出る。

その時ふと気付いた。この廊下を私は知っている。人生における最初で最後のインハイの時にも、同じ場所を歩いたのだ。ああ、そういえば、この会場だっけ。

あの夏も、私はこの場所を歩いた。

自分をエースに選んでくれた仲間の為、自分を応援する人の為に、他校の高校生たちの夢と青春を台無しにして進みつづけたあの夏。

印象に残ったのは、優勝の喜びを仲間たちと分かち合う瞬間——などではなかった。

今でも思い出すのは、敗退校の選手が私を見るときの、呪うようなあの目。

恨むことも怒ることもできず、魂が抜けたみたいに私を見つめる相手選手の目。

それらの視線を一身に浴びながら、この無機質な廊下を歩いたこと。あの後ろ暗い気持ち、まだ私は忘れられずにいた。

自分が打てば、必ず傷付く誰かがそこにいる。自分が打つのを辞めても、必ず誰かを悲しませる。どの扉を開けてみても、そこには絶望が塞がるばかりだった。それでも進み続けることで、何かの答えが得られると信じてここまでできたけれど、もうだめだった。また誰かの大切な何かを奪ってしまいそうで、全力で打つということが怖くなっていく自分がいた。それでも今更麻雀以外の道を選べない私だから、潰れそうな地元のクラブチームに身を寄せて、自分の力を役立てて貰おうと思った。

一人、気にかけていた選手のことを思い出す。

赤土晴絵さん。

あの夏のインターハイで、私に唯一跳満を直撃させた阿知賀高校の一年生。そして、私が壊してしまった選手の一人。

熊倉さんによると、あの人は今二十二歳。一時期は牌に触ることさえできなかつたらしいけれど、現在は大学に通うかたわら、地元の子供たちに麻雀を教えているらしい。

私がこの舞台を降りるぶん、彼女のような人たちにどうか明るい道が開けますように

——私は祈りながら廊下を歩いた。

出口まで半ばというところまで来たとき、なにか後ろが騒がしくなった。振り向くと、業を煮やした記者の面々が押し寄せるようにこちらに向かっていた。

記者の波は、連盟の人達が作っていた壁も簡単に押し崩して、あつという間に私をとり囲んでしまった。すぐに大量のカメラやマイクが向けられ、四方から質問が浴びせられる。私は顔を伏せたまま、逃げるように歩みを早めた。

「全ての個人戦出場を辞退するということですが、もう一度詳しくお話してもらえますか!？」

—— 記者会見でお話したことが全てですので。すみません。

「恵比寿を離れるにあたって、監督やチームメイトからの反対などはありませんでしたか!？」

—— すみません。急いでいるので。

「今まで応援してくれたファンの皆さんにもう一度コメントをお願いします!!」

——つくばでも頑張りますので、応援よろしくお願いします。

「五輪への初出場も見送られるということですか!？」

——もうしわけありません。

「体調不良などが原因という噂がありますが、事実ですか!？」

——そういったことは特に。

「異性関係が原因という一部報道がありますが事実でしょうか!？」

——そのような事実はございません。

「今後の第一線への復帰は考えていますか!？」

——ごめんなさい。

「監督など、指導者の道に進まれることは考えていますか!？」

——えつと、ごめんなさい。

「小鍛治プロ!!もう少しお時間頂けませんか!？」

——ごめんなさい。車を待たせているので。

ごめんなさい、ごめんなさい。まるであの夏みたいに、黒い何かに追い立てられて歩き続ける。

質問の雨の中を押し通り、そのまま記者を引き連れ、施設のエントランスを抜けた。すると突然、乾いた冷気が身体を覆い、目の前に真っ白な世界が開けた。

外は大雪だった。朝方から振り続けていたけれど、もうこんなに積もっているなんて。私は思わず立ち尽くした。

埋めつくすような白さに包まれた都心の風景が、黒い雑音に染まった私の頭の中を晴

らしていく。ビルも道路もなにもかも白いベールに覆われて、空の色と同化しようとしているみたいだった。私もここに留まれば、雪の中に埋もれて空の色に溶けることができるだろうか。誰に見つかれることもなく、雪の中の花のように、咲くことができるうか。私の麻雀は、人を傷付けなくて済むだろうか。

もう私には、周りの記者の声は耳に入らなかつた。代わりに注意を引いたのは、白い雪のなかに浮かぶ小さな赤い影だ。

雪の向こうから、その赤いシルエツトはこちらに近付いてきた。近付くにつれて、それが着物を着た少女であることがわかつた。

そうだ。あの子だ。

「健夜さん」

白い息を吐いて彼女が私を呼んだ。冷たい風にたなびくマフラーを抑えながら、その瞳を微かに潤ませて。

「……咏ちゃん、ごめんね……私」

現実を前にして、言葉が見つからなかつた。私は知っていたのだ。彼女が誰よりも自分のことを慕っていることを。そして誰よりも自分と戦いたがつていたことを。きつと彼女は悲しんでいるし、怒つてもいる。マスコミの質問責めなんかよりずっと、彼女のままっすぐな瞳にいたたまれなくなる。

「咏ちゃん……私思うんだ。咏ちゃんなら、きつと」

「あたし待ちませんから！」

遮るように彼女が叫んだ。

「……え？」

「あたしは『健夜さんが帰ってくるの待ってます』なんて、言ったりしませんから」

私の周りにいた記者の輪が半分に千切れて、咏ちゃんをとり囲んだ。

彼女は気にも留めずに続けた。

「健夜さんがいなくなっただって、同じっすよ。健夜さんはずっとあたしの目標で、それは変わらないんだ。だから待たない。だってあたしはこれからも、小鍛治健夜を追いかけつづけるんだから」

震えるその言葉が、硬い雪に足跡をつけるみたい私の胸の奥を叩いた。

「だから待つててください健夜さん。あたし頑張るんで。いつか本気の健夜さんと勝負になるくらい、もつと強くなるから。絶対強くなるから。それで、健夜さんが楽しみめそうだと思うくらい強くなってたらさ、その時はまた改めて、倒しにきてくださいよ」

彼女は何かをこらえながら、不敵な笑みを浮かべて私をまつすぐに見据える。

「慕ちゃんも、はやりんも、野依さんも、善野さんも、他の後輩達もみんな同じ気持ち。みんなで強くなって、健夜さんが毎試合、一切手加減できないくらい、ハイレベルな場

所にしてあげるからさ……だから……」

言い終わらないうちに、彼女が膝をついて雪の上に倒れそうになる。あわてて周りの記者たちが支える。俯きながら彼女が続けた。

「だからお願いします健夜さん……いつか、いつかまたあたしと…………」

少女は記者の支えからゆっくりと滑りおちて、雪の上にへたりこむ。

瞳から、雪が溶けだしたようにぼつりぼつりと雫が落ちた。間を置いて、この子には不似合いなくらい弱々しい泣き声が、冬の風の中を冴え返って小さくひびいた。

もうカメラのシャッター音は止んでいる。

記者たちは、小さくしゃがんですすり泣く彼女の周りで、無言で立ち尽くしていた。

真つ白な雪の世界で聞こえるのは、真つ赤な着物の女の子の泣き声と、いつもより確かな鼓動の音だけだ。

自分の肩を見ると、少しだけ雪がかかっていた。私はそれを軽く払い、そして白い地面に膝を立てて、濡れた彼女の顔を、ぎゅっと胸の中にしまいこんだ。

「……わかった」

咏ちゃんのおかげだよ。答えが出たんだ。

約束する。いつかその時がきたら、必ず――。

21世紀、世界の麻雀競技人口は1億人の大台を突破。

日本でも大規模な全国大会が毎年開催され、猛者ひしめく日本麻雀界では最強の称号を掴み取るべく、プロ雀士達が覇を競っていた。

これはその頂点を争った、大人達の軌跡。

一日目（1）

—— 針生えり、二十九歳。

—— 二月二十二日、午後一時、雪。

—— 山形県、南陽麻雀会館、和室。

緊張していた。

試合に出るのは私じゃないのに。

本番までの猶予は、もうあと三時間しかない。

全日本麻雀選手権決勝。五番勝負の第一戦。

選手用の控え室として使用される会場の和室に、私は呼ばれた。めったに人を頼ったりしない彼女が、一介のアナウンサーでしかない私に付き添いを頼んだのだ。必要としてくれたことは嬉しかったし、なんとか力になりたいと思つた。

三尋木プロが助けを求める理由は、私にも想像がついた。

——小鍛治健夜永世八冠。日本人なら誰もが知ってる、不敗のレジェンド。五年ぶりにこの表舞台に姿を表したと思えば、ノーシードから一度も放銃すらせずに決勝戦に勝ち上がってきてしまった。三尋木プロはこの人と何度か対戦しているが、一度も勝利したことがないのだ。そして今日、五年ぶりに二人は激突する。

二人の因縁については、あらゆるメディアが事あるごとに話題にしていたから当然私も知っている。いったい彼女はどんな気持ちで、来たる決戦の時を迎えようとしているんだろう。私には、重圧のなかで静かに集中する三尋木プロの姿が目には浮かぶようだった。

三日前、震える声で、会場に来てほしいという咏さんからの電話を受けた時は、本当にいてもたってもいられなくなった。だから、大事な仕事があつたのに急遽無理を言ってお休みにして貰い、こんな真冬の大雪のなかでアクセスの悪い山形の会場に駆けつけた。この扉の向こうで、三尋木プロはどんな表情をしているんだろう。プレッシャーのあまり泣いていたらどうしよう。いや、こんな時だからこそ私が呼ばれたんだ。励ましの言葉や緊張をほぐすための冗談を、ここに来るまでに数百パターンもメモしておいた。これだけあれば十分のはず。さあ咏さん、何も心配いりません。思い切り私を頼ってくださいね——。

しかしそれは杞憂にすぎないことを、私は数秒と待たず思い知らされるのである。

* * *

「——おつしや、めくりで一発！ 四光^{しこう}、青タン、月見^{つきみ}で一杯^{いっぱい}！ こりやまたあたしの大勝ちだねい」

三尋木プロが威勢よく、麻雀にはない役の名前を宣言する。

私はいったい何をしてるんだろう。

「うっわ、ここままで862文勝ちだぜい。針生さん大丈夫？ 払えんの？ なんなら身体で払ってみるか？」

「払いませんし。そもそも賭けてませんし」

「そなの？ あたしはちゃんと自分の身体を賭けてただけだねい」

「勝手に賭けないでください」

もはや緊張どころではなかった。これがトッププロのメンタリテイなのだろうか。大一番を間近に控えて、三尋木プロは愉しそうに私とゲームに興じている。

「しっかしまあ、針生さんって花札弱いんだねー」

「いや……私が咏さんにこういうゲームで勝てるわけないじゃないですか」

「とはいってもさー。『こいこい』なんてほとんど運のゲームだよ？ 麻雀と変わらんかねー？」

「麻雀と同じならやつぱりダメじゃないですか」

あはは、そっかー、と笑い飛ばす咏さんにムツとする私。花札においても彼女の強運は発揮されて、私は脅威の1ー連敗を遂げていた。こんな状態が続いては楽しめるはずもなく。

「あの……正直に言っていていいですか？ 全然つまらないです」

「あたしの緊張をほぐすためのレクリエーションなんだから、針生さんはつまんなくてもいいんじゃないの？ しらんけど」

花札の山を切りながら、咏さんがぬけぬけと言う。

「そんなこといって、咏さん全然緊張してないじゃないですか。もう本当に心配したんですからね。あんな電話してきて、私のほうが緊張しちゃったじゃないですか」

「んじや緊張ほぐしてあげるからさ。とりあえず服脱ごーか？」

「脱ぎません！」

のらりくらりと下ネタを飛ばしつつづける咏さんに頭を抱える。この人と話しているとイライラが募って、私はつい三十路^{みそじ}手前の女子が作ってはいけない表情をしてしまう。ああ、なんという取り越し苦労。今後私のシワが増えたら、ぜんぶこの人のせいに

して訴えを起こそうと決めた。

「よし、もうひと勝負いつてみよっ」

私の不機嫌顔をよそに、彼女は花札をすばすばと配り始める。

「……良いんですか？ もう試合開始まで一時間もないんですよ？」

「じゃあ他に何をしたらいいんかねい？」

わっかんねくとわざとらしく首をかしげる三尋木プロ。この仕草をもう一度さらた
ら暴力に訴えてしまいそうで自分が怖い。自分を諫めるためにも笑顔を作る。

「ほら、もつとこう……過去の牌譜を確認したり、牌の感触を確かめたり、集中力を高め
るために瞑想したり……そういうようなことですよ」

「あー。なるほどねい」

すると、彼女は目を細めておもむろにじーっと私のことを見つめはじめた。

私も目を細めて尋ねる。

「なに見てるんですか？」

「集中するために針生さんの顔を見てた」

「……どうでした？」

「思ってたよりおっぱい大きい！」

「顔見てないじゃないですか！」

まったくこの人は……。あくまでマイペースをつらぬく三尋木プロに思わず頭を掻いてしまう。

「でもまあうん。たしかに。そろそろちよつくら準備しなきゃだねい」

配りかけの花札を脇に置くと、咏さんはやおら立ち上がり……。なにを思ったか自分の着物の帯をするとほどき始めた。私はその光景に面食らって思わず顔をおおってしまう。

「ちよつちよ、なに急に脱いでるんですか!? まさか本当に私の身体をー!」

「あはは、ただの衣装替えだよ。ほら、着付けするから針生さんも手伝ってー」
「き、着付け? あ、はい、分かりました……」

* * *

「ちよつと針生さん、ここの腰紐押さえといて。締めるから」

「ええ、自分かりませんよ。こうですか……?」

「ひやつ……そこはあたしのおしりだよー針生さん」

「わ、ごめんなさい……って全然触ってないですよ!」

密着する薄着の咏さんを前に顔を赤くしながら、着物の着付けのお手伝いをする。し

かし、いつもこんな本格的なお着物を自分一人で綺麗に着こなしているのだから、女として正直感心してしまう。人は性格によらないものだ。結局、私はおろおろしているだけで、ほとんどの行程を彼女がひとりですべて終らせてしまった。

「よし、できあがりつ。針生さんありがとねい」

姿見の三面鏡を見ながら、着崩れがないかを確かめる咏さん。私はなんとなく、その姿に不安のようなものを感じた。違和感を覚えた原因はデザインだ。いつものトレードマークである真紅のおめでたいカラーではなく、今回は白よりも白い、真つ白な単衣ひとえ。神前婚で着られる白無垢しろむく——というよりも死に装束というべきだろうか。三角頭巾をあたまに付けてしまえば、それはもうオーソドックスな幽霊の出で立ちそのものであるように見えた。

「どしたの針生さん。ひよつとして見とれちゃったかいねい？」

視線に気付いた三尋木プロが、鏡越しに私に訊いた。

「あの……三尋木プロ、死ぬんですか？」

「はい？ いや、死なんし。どしたの」

「それ、完全に死に装束じゃないですか。なんだか縁起が悪いですよ。大事な晴れの日ののに」

私は思ったことを口にしていく。背を向けたまま、鏡の中の三尋木プロがいつと口

の端を広げる。

「……この白単衣、厳密に言えば『経帷子』きようかたびらつていうんだよねい。三角頭巾は『天冠』てんかん。それとあわせて手甲てっこうと脚絆きゃはん、編み笠あみかさに草履ぞうり、数珠ずしゆに木の杖、頭陀袋ずたぶくろに六文銭ろくもんせんとくりやあ

——閻魔様にも覚えめでたき、死に装束つてわけだねい」

鏡を通して不遜な笑みを見せる三尋木プロ。この人といると、たまにこんな風に雰囲気が変わる時がある。眼光はするどく、声音は凄みを増す。対局中の、勝負師としての彼女の顔が顕れたのだ。

「じゃあ、本当に死装束なんですか。今日にかぎつてそれを着る意味があるんですか？」
「意味かあ……ま、願掛けに近いけどね。なにせ、この世ならざる者を相手に戦おうつてんだ。そんなら私もそれにならつて、この世ならざる者に身を窶やつしてやろう、つてとこかねい」

この世ならざる者……他ならぬ小鍛冶プロのことだ。人ならぬ麻雀の神を相手にするには、たしかにまともなアプローチではもはや通用しないのかもしれない。三尋木プロが静かに、目を閉じて続ける。

「……確かに勝ち目は薄いよ。でも勝ちを捨てた訳でも無い。それが砂漠の宝石だろうが、雪崩に埋もれた花だろうが関係ねえ。どんなに小さくてもいい。そこにあると分かっているんなら、掴みに行かなきゃ嘘なんだ。……まあ見てな」

三尋木プロはこちらを振り返ると、私の前で立て膝になり、おもむろに花札の山をつかんで、裏向きにばらまいた。

「ここから光札ひかりふだ五枚、針生さんの指名どおりにめぐり当てる」

咏さんは高らかに宣言した。白い着物の彼女を中心に、尋常ならざる気迫のようなのが渦まいて見えた。今の彼女ならば、本当に引き当ててしまうかもしれない。私は乾いた空気をごくりと飲み込んで、最初のカードの名を口にする。

「それなら……『桜さくらに幕まく』で」

「ふふ、お易い御用だねい」

言うが早いのか、三尋木プロはすぐにひとつの札を選び、パチンと鋭い音を立ててひっくり返した。私は絵を見る前から、引き当てられたことを直感して、思わず顔を背けてしまった。私は恐る恐る、その札をあらためる。

するとその札は——『梅うめに鶯うぐいす』だった。

* * *

「もう、元氣出してくださいよ三尋木プロ」

「元氣の出し方なんて知らんし……うう」

結局のところ、あれから何枚も札をめくってみた咏さんであったが、お目当ての札を当てたのは12枚目のことであった。

今はもう、すっかりさっきの迫力が霧散して、テーブルの上に突っ伏すだけだ。

「だつてさ……超カツコわるくね？ もうダサすぎて生きていけねーつて。一体誰なんだよ、あたしにあんな恥かかせたのは」

それは咏さんです。という言葉は、さらに彼女の腹の虫を暴れさせそうなので言わずにおいた。

「はあ、こんな気持ちで健夜さんと試合かー。だから花札なんてやりたくなかったんだよねい」

「えーつとはいい……そうですか。私はおかげさまでリラックスできたので問題ないですが」

支離滅裂な主張をする彼女を見ていたら、この前うちの局でやった報道特番にでてきた犯罪者を思い出してしまった。さすがにこれを言ってしまうと本当に傷付きそうなのでこれも言わないでおいた。

「こうなったら、針生さんのエロ画像でも見て元気出すかねい」

「早く削除してください。訴えますよ」

「ちっ、大人げないなー。つてかそんなもん持つとらんし」

「大人げないのはどう考えても咏さんですよ?」

私は満面の笑顔で答えた。

と、ここで、「失礼します」という声が扉の向こうから響いた。大会進行スタッフが三尋木プロを呼びにきたのだ。

彼女は「ほーい」と気のない返事をして、軽い手荷物と猫蛇の人形を手に取って立ち上がる。

「それじゃあ行ってくるねい、元氣無いけどさ」

浮かない顔で私を見る咏さんは、なんだか本当に寂しげだった。あるいは、もつと別のなにかを期待しているようにも見えた。——ああ、なるほど、そういうことか。私はひとつ大きなため息をついてから、ひとつ隠していたことを教えてあげることにした。

「……元氣を出して戦って、いつもみたいに笑顔で帰ってきてください。そうじゃなきゃ明日の誕生日ケーキは、私ひとりで食べてしまいますからね」

それを聞くと、咏さんの表情が分かりやすすぎるくらいにぱーつと明るくなっていった。誕生日覚えてくれてたんだ、という心の声そのまま漏れ聞こえてくるみたいだった。

「え……ええつと、そうなんだ、ふーん。それじゃあ余裕でぶつ倒して速攻で戻ってくる

かねい！」

「はい、応援してます」

「頑張るからね。……おっとそうだ、あたしからもこれあげる」

彼女から差し出されたのはペットボトルだった。

「なんですかそれは」

「これ、飲みかけの午後ティー。これ飲むと三尋木プロと間接キスできるんよ」

「そうですか、じゃあそのゴミ箱に捨てときます」

「決断早くね!? あ、もう時間だわ。じゃあ行ってくるからねい、えりちゃんー」

あからさまに嬉しそうにはしやぎながら、咏さんはついに会場のほうへ移動していくのだった。

えりちゃんって誰のことだろう？ あ、私のことか。

それにしても……サプライズにするはずだったのに、予定が変わってしまった。私が咏さんの誕生日を忘れるわけがないじゃないか。三尋木プロという人はいつも肝がすわってるくせに、変なところで小心なところがある。でも、それが可愛らしくもあるんだけれど。

私の手には飲みかけの午後ティーが握られていた。まあ、ちよつとくらいなら、飲んでみてもいいかな……。

そんなわけで私は、それをどきどきしながら飲んでみたんだけど、それはやっぱりちよつと温いだけの普通の午後ティーだった。

私はその後、試合を見に行かなかつた。なぜだか、テーブルの上に突つ伏して眠ってしまった。早起きしたから、疲れてしまったんだろうか。適当にばらまかれた花札を見ていたら、なんだかとても眠くなつたのだ。夢の中で出会つた咏さんはとても積極的で、なんどもキスをしてくれた。それがありえないことだと分かつていたから、私もそれが夢だとすぐに気付いて、目覚めた時に少し悲しくなつた。

それから、後になつて分かつたことだけ——咏さんのくれた午後ティーには薬が混ぜられていた。そして三尋木プロが病院に運ばれたことを知つたのは、私が眠つてから五時間後のことだつた。